
【研究ノート】

日本海軍における観艦式の変遷

石丸 安蔵

<要旨>

日本海軍の観艦式は明治、大正、昭和の3つの時代を通じ合計19回実施された。日本海軍の創設時期に、どのような経緯で観艦式を実施することとなったのだろうか。日本海軍の観艦式の歴史を調べようとする、実施年月日、実施海域、参加艦艇の隻数、御召艦の艦名といった一覧表とともに、観艦式の起源について簡単に説明した文献にたどりつく。多くの文献の内容はほぼ同一であるものの、観艦式について深く掘り下げた内容のものは見当たらない。本稿は、海軍省が所蔵していた「公文備考」のなかで、観艦式に関連する一次史料を紐解き、観艦式を実施することとなった経緯や、観艦式に関連する海軍の各種規則、実施するうえで直面した各種問題点とその対応策などについて整理し、日本海軍が実施してきた観艦式の変遷について明らかにするものである。

はじめに

2020（令和2）年、防衛省における自衛隊記念日の各種記念行事は、新型コロナウイルス感染症の影響により、中止または縮小して実施されたが、例年は自衛隊記念日の11月1日前後に記念行事として追悼式、観閲式、感謝状贈呈式、音楽まつり、体験飛行、自衛隊記念日レセプション等が実施される。観閲式は、陸海空自衛隊がそれぞれ実施している。陸上自衛隊が朝霞駐屯地において実施する中央観閲式、海上自衛隊が相模湾において実施する観艦式、航空自衛隊が百里基地において実施する航空観閲式があり、1996（平成8）年からは3自衛隊が、毎年、順番に持ち回りで実施する形式となった。海上自衛隊の観艦式は、1957（昭和32）年東京湾において当時の内閣総理大臣岸信介が観閲官となり、艦船32隻、航空機49機が参加して実施されたのが、その始まりである。その後、内閣総理大臣や防衛庁長官等が観閲官となって継続されており、2015年10月18日の観艦式で28回目となった。

このように、現在海上自衛隊が実施している観艦式は、日本海軍においても観艦式と呼ばれていたことから、あたかも日本海軍の観艦式の歴史を受け継いでいるかのようと思われる。では、日本海軍における観艦式はどのようなものだったのか。

日本海軍における観艦式について調べてみると各種文献¹から容易にその実施状況を調べることができる。その内容は、観艦式の起源に関する説明と、観艦式の実施年月日、場所、御召艦の艦名、参加艦艇の数が集計された一覧表が主なものである。ところが、日本海軍がどのようにして観艦式を実施することになったのか、観艦式という行事がどのように変遷してきたのか、実施する根拠となった規則はどのように制定されたのか、また実施するにあたり発生した問題点とその解決策等に言及した先行研究²は極めて少なく、日本海軍の観艦式に特化して論じた研究は皆無である。

本稿で使用する史料に、海軍省の「公文備考」がある。「公文備考」は1876（明治9）年から1937年までの文書が現存し、教育、艦船、兵器等の項目に区分、保管されている。本稿ではこの「公文備考」から観艦式関連の史料を抽出し、観艦式実施に関連した意志決定の流れを読み解き、その変遷に関し新たな解明を試みる。観艦式がどのように誕生し、時代の経過とともにどのように変化したのか、どのような規則が関係したのか、その推移を整理し、観艦式の分類を行い、実施状況等を踏まえ観艦式の変遷について論じる。

なお、防衛研究所が所蔵している「公文備考」は、アジア歴史資料センターによりネット上で公開されている。本稿では史料を特定し、アクセスを容易にするため、11桁で表わされるレファレンスコードと画像数を明記する。また、「公文備考」等の一次史料から引用した部分については、旧字体の漢字は新字体に、カタカナ表記は平仮名表記とした。

1. 観艦式の起源と明治初期の変遷

（1）観艦式の起源

わが国における観艦式の起源や沿革について参考となるのは、海軍省刊行の『海軍

1 海軍有終会編『帝国軍艦写真と史実』（丸善株式会社、1935年）、海軍有終会編『近世帝国海軍史要（増補）明治百年史叢書（225回）』（原本発行1938年。原書房、1974年）、海軍編集委員会編『海軍 第十二巻』（誠文図書、1981年）。小池猪一編著、末國正雄監修『海軍史事典』（国書刊行会、1985年）、海軍歴史保存会編『日本海軍史 第十一巻』（第一法規出版、1995年）等が主要な文献である。

2 小倉徳彦「日露戦後の海軍による招待行事」『日本歴史』第827巻（2017年4月）57-72頁、木村聡「ワシントン軍縮後の海軍大演習」『軍事史学』第55巻第1号、2019年6月、118-137頁、木村美幸「大正期における日本海軍の恒例観艦式」『メタブティヒアカ：名古屋大学大学院文学研究科 教育研究推進室年報』第11巻、2017年3月、19-24頁等の先行研究がある。

制度沿革』である。1938（昭和13）年10月に海軍大臣官房が編纂したもので、その緒言には、「明治元年より昭和十一年末に至る迄に海軍並に関係ある法令条約等を類別輯録し且必要なる沿革記事を添載したるものにして海軍諸制度の研究または参考資料に供せむが為之を編纂せり」とあり、海軍の諸制度を研究するうえで必読の書である。同書の「観艦式に関する沿革」には、「明治元年三月二十六日に明治天皇が大阪の天保山沖において諸藩軍艦を観覧³ あらせられ給ひしはわが国における観艦式の最初のもの」とあり、観艦式に関する制度の沿革が判明する⁴。さらに観艦式という名称の詳細については、海軍有終会刊行の『近世帝国海軍史要』が、観艦式の「観」は「示す」の意義があり、観兵式において威武を示すのと同じ意義であるとし、「観艦式とは、各国の君主又は大統領が、艦上から海上式場たる錨地に碇泊せる多数艦船の威容を親閲せらるる事で、恰も陸軍の観兵式の如く最も莊嚴なる儀式である。その歴史的起源は、西紀一三四一年英国国王エドワード三世が、自ら艦隊を率いて英仏戦争に出征の際、その威容を親閲になったときに始まる」としている⁵。各種文献に記載された観艦式の起源についての説明はほぼこの内容である。

日本海軍の創設は、明治新政府が最初の官制を制定した1868（慶應4）年1月17日とするのが一般的である。海軍創設以降、新規の行事が追加されていくなか、観艦式となる行事は、最初から観艦式と呼ばれたわけではなかった。明治天皇が天保山へ行幸した際に諸藩に示された内容は、「三月二十六日海軍観覧のため、卯の半刻⁶ 大阪行在所御発輦⁷ 天保山へ行幸あらせられ候事」であり、当初は「観覧」、「天覧⁸」等と呼ばれていた。また、明治初期には観兵式と呼ばれ、天皇が親閲する陸軍部隊のパレードと同時に行われており、陸軍の行事として認識されている。

（2）明治初期の変遷

1868（明治元）年の天保山沖での観覧以降、のちに観艦式となる諸行事が試みられた。箱館戦争を終えた兵部卿の有栖川宮熾仁親王が、1869年6月16日に品川沖において凱旋した艦船を巡視している。1870年1月11日には明治天皇が「海軍始の式」を挙行し、1871年1月8日および1872年1月9日にも兵学寮校舎の新築落成を期として、「海軍始の式」を挙行している。その後1873年から1878年にわたり、毎年1月に兵学校

3 「観覧」（えいらん）とは、「天皇の御覧」のこと。天覧、聖覧、上覧と同義（井原頼明『増補皇室事典』（富山房、1942年）100頁）。

4 海軍省編『海軍制度沿革 卷十四』（原本1941年発行。原書房、1971年）895頁。

5 海軍有終会編『近世帝国海軍史要』（原本1943年発行。原書房、1974年）484-492頁。

6 今日の時刻で、午前7時を意味する。

7 発輦（はつれん）とは、「天皇の車が出発する」こと。天皇の鹵簿（ろぼ）の御出発。鹵簿とは、近衛騎兵の儀仗警備を備えた行列のこと（井原『増補皇室事典』87、96頁）。

8 天覧（てんらん）とは、「天皇が見る」こと。観覧（えいらん）と同じ意味（井原『増補皇室事典』100頁）。

で「海軍始の式」が挙行され、天皇が兵学校生徒を親閲する機会が設けられていた。

しかし「海軍始の式」において、兵学校生徒のみ明治天皇に親閲されることに異議を唱えた川村純義海軍卿が、1878年12月「海軍始の式」を廃止した。川村海軍卿は、代案として春と秋に艦隊の運転ならびに操練等の諸式を観覧する機会を設け、海軍の一層の進歩に供することができるとした意見を太政大臣に上申した。その結果、翌年5月には天皇が艦隊に親臨すること等について請議することとなった⁹。川村海軍卿が太政大臣に宛てた意見書の内容は、「陸海軍において平素は武を講し、兵を練り、戦時においては一国の興廃を直接に負託しており、その責任は重い。特に有事の際に、天皇が陸海軍の大元帥の職に任ずる際に、他の文省と差異が有る。これらのことを熟考すると、平時と雖も軍事に親しみ、艦隊の練度や兵士の様子、造船技術等を観察していただくことが重要である」というものであり、天皇が陸海軍について親閲することが重要であると上申していた。

1879年に「海軍始の式」が廃止されてから1890年4月18日に実施された観兵式までの間、一見すると、のちに観艦式となる諸行事は実施されていなかったように思われるが、行幸啓¹⁰の状況や御召艦一覧表¹¹から、明治天皇は海軍の多くの行事に赴いており、頻繁に海軍艦艇に乗艦していたことがわかる。

2. 観艦式に関連する諸規則

（1）観艦式自体を定めた規則

観艦式という名称が使用されたのは1900（明治33）年が初めてであるが、規則として制定されたのは1913（大正2）年10月15日の観艦式規程による。同時に観艦式事務委員規程が定められ、事務委員の編制とその役割が決定された。観艦式規程により観艦式の分類は、特別観艦式、大演習観艦式、恒例観艦式とされた。特別観艦式は国家の大典等に当り挙行するもの、大演習観艦式は大演習または特別大演習の終期に挙行するもの、恒例観艦式は毎年11月10日東京湾において挙行するものと定められた。また、観艦式事務委員規程は、観艦式事務委員をその都度任命し、観艦式事務委員は海軍大臣の命を承け観艦式指揮官と連絡を保つこと、それに加えて、御次第書に関すること、賜宴に関すること、陪観船拝観船に関すること、外国艦船参列に関する

9 海軍省編『海軍制度沿革 卷十四』895頁。

10 海軍省編『海軍制度沿革 卷一』（原本1941年発行。原書房、1971年）第8章「行幸啓」。

11 海軍有終会編『幕末以降 帝国軍艦写真と史実』（海軍有終会、1935年）85-86頁。

こと等を定めている。

観艦式規程は、1919年10月24日に改訂された。観艦式の分類から、恒例観艦式が削除され、特別観艦式と大演習観艦式に変更された。1930(昭和5)年8月28日には、観艦式規程という名称が観艦式令に改められ、観艦式の名称に関し、「大演習観艦式は演習の呼称に従い其の名称を付与する」とされた¹²。つまり、大演習観艦式には大演習の際に実施する観艦式と、特別大演習の際に実施する観艦式の2種類が存在しており、それら2種類の観艦式を明確に区別するために、演習の名称と実施年度を観艦式の名称に付与することとした。

(2) 演習に関する規則

大演習観艦式において、演習と観艦式はどのような関係にあったのか。海軍における演習に関する最初の規則は、1887年6月1日制定の海軍演習概則であった。この規則により演習は月次演習、小演習、大演習の3種類に区分された¹³。1897年2月12日には海軍演習令を定め、四季演習、小演習、大演習に区分を改めた。演習に関する規則は、その後も数度にわたり改定されたが、天皇が統監する演習を特別大演習とすることに変化はなかった。

先に述べたとおり大演習観艦式には、大演習の際と特別大演習の際に実施する2通りの観艦式が存在していた。それにより混乱が生じた例として、1927年の文書起案の段階で、特別大演習観艦式と大演習観艦式という名称が混在して使用されるという事例が挙げられる¹⁴。こうした混乱を避けるため、1930年に「観艦式呼称に関する件通牒(9月10日)」により「昭和五年特別大演習観艦式」という名称が使用されることとなった¹⁵。その結果、1930年と1936年の2度の大演習観艦式は、特別大演習観艦式と呼ばれることになった。

(3) 礼式に関する規則

礼式に関する規則は、1872年1月軍隊における敬礼の実施に関する規則が最初であるが、観艦式に関する規定は、1914年2月10日の海軍礼式令で制定された¹⁶。そ

12「昭和14年12月25日現在 10版 内令提要追録第6号原稿」「巻1 追録／第1類 官制(2)」(防衛研究所蔵)、JACAR Ref.C13071985300、画像0096-4。

13 海軍演習令の沿革については、海軍省編『海軍制度沿革 巻十四』799頁が参考になる。

14「特別大演習に関し発表事項の件」「昭和2年公文備考演習1巻67(海軍省-公文備考-S2-67-3562)」(防衛研究所蔵)、JACAR Ref.C04015771600。「特別大演習に関し発表事項の件」(画像0158-0162)には、「特別大演習観艦式」という名称が使用され、「昭和2年特別大演習計画書」(画像0168-0172)には、「大演習観艦式」という名称が使用されている。

15「観艦式呼称に関する件通牒」「昭和5年公文備考特別大演習観艦式関係書類綴(海軍省-公文備考-S5-166-4102)」(防衛研究所蔵)、JACAR Ref.C05021473000、画像1622。

16 海軍省編『海軍制度沿革 巻七』(原本1940年刊行。原書房、1972年)653頁。

こには、「観艦式は国家の大典に際し又は大演習其の他例年秋季に於て之を行ふを例とす」と「親閲の当日は軍艦は満艦飾を、駆逐艦水雷艇及潜水艇は艦飾を行ひ夜間は軍艦に限り電燈艦飾を行ふ」という条文が見られる。これらの条文は、1913年の観艦式規程制定後に追加されたものであり、「国家の大典」、「大演習」、「例年秋季」に際して行うとされている部分は、観艦式規程における観艦式の分類である特別観艦式、大演習観艦式、恒例観艦式に対応していた。

3. 観艦式の分類とその具体的な実施状況

（1）観艦式の分類と実績

各種文献に掲載されている観艦式の実施状況一覧表は、ほぼ同じ内容である。海軍において1890（明治23）年に実施された行事は海軍観兵式と呼ばれたが、1900年以降、観艦式と呼ばれるようになり、明治、大正、昭和にわたり19回行われた。観艦式を分類別に集計した実施状況は、表1のとおりである。

表1 観艦式の分類と実施状況

分 類	細分類	年月日	場 所	名 称
—	（初期のもの）	M元年 3月26日	天保山沖	観兵式
		M2年 6月16日	品川沖	凱旋整列式
		M23年 4月18日	神戸沖	海軍観兵式
特別観艦式	国家の大典を慶賀する観艦式	T4年 12月 4日	横浜沖	特別観艦式
		S3年 12月 4日	横浜沖	大札特別観艦式
		S15年 10月11日	横浜沖	紀元二千六百年特別観艦式
	凱旋を記念する観艦式	M38年 10月23日	横浜沖	凱旋観艦式
		T8年 7月 9日	横須賀沖	御親閲式
大演習観艦式	大演習直後の観艦式	M33年 4月30日	神戸沖	大演習観艦式
		M36年 4月10日	神戸沖	大演習観艦式
		M41年 11月18日	神戸沖	大演習観艦式
		T元年 11月12日	横浜沖	大演習観艦式
		T8年 10月28日	横浜沖	大演習観艦式
		S2年 10月30日	横浜沖	大演習観艦式
		S8年 8月25日	横浜沖	大演習観艦式
	特別大演習直後の観艦式	S5年 10月26日	神戸沖	特別大演習観艦式
		S11年 10月29日	神戸沖	特別大演習観艦式
恒例観艦式	恒例による観艦式	T2年 11月10日	横須賀沖	恒例観艦式
		T5年 10月25日	横浜沖	恒例観艦式

（注）年月日の欄における年号は、明治をM、大正をT、昭和をSとして表記した。

（出所）筆者作成。

(2) 特別観艦式の実施状況

ア 国家の大典を慶賀する観艦式

1928（昭和3）年11月10日昭和天皇の即位の大礼が京都において行われた。陸海軍はその1年ほど前から、この大礼を期して陸軍は大礼観兵式を、海軍は大礼特別観艦式を実施する検討を始めていた。陸海軍が対をなす形での実施となることから、陸海軍の間で調整が進められ、2月上旬には具体的な日程が決められた¹⁷。陸軍の大礼観兵式は12月2日に実施し、当日雨天の場合には12月3日に実施すること、両日とも雨天の際には、適宜延期すること等が決められた¹⁸。海軍の大礼観艦式は12月4日に実施し、予備日を12月5日とすることが内定した。天皇の行動予定については、御次第書において示されるものであり、宮内省側が作成していた。大礼特別観艦式の次第書および行幸の概要は、「公文備考」に記録が残されている¹⁹。

観艦式当日の様子について、皇族・王公族および大勲位以下の陪観者数が約5,300名、拝観者数が約8,800名との記録から、観艦式における陪観者数と拝観者数の合計が約1万4千名となり、その人出から規模の大きさが判明する²⁰。

国家の大典を慶賀する観艦式に分類した「紀元二千六百年特別観艦式」は、1940年10月11日に横浜沖で開催された。しかし、その年はお祭りムードにひたっている状況ではなかった。7月22日第2次近衛内閣の成立とともに武力行使を排除しない南進政策が決定され、9月の北部仏印進駐と日独伊三国同盟締結により日米関係は悪化、日を追って緊迫の度を高める事態となっていた。この観艦式が、日本海軍における最後の観艦式になった。

イ 凱旋を記念する観艦式

凱旋を記念する観艦式は、1905年の日露戦争後における観艦式と、第1次世界大戦の際に地中海に派遣された第2特務艦隊が帰国した際に実施された1919（大正8）年の御親閲式の2回である。

日露戦争後の凱旋観艦式は盛大に実施された。日本軍は旅順を攻略し、ロシア東洋艦隊を制圧したのち、陸軍は3月10日の奉天会戦において勝利を収め、海軍は5月

17「御次第書作製に当りての参考打合及覚書等」「昭和3年公文備考儀制25巻44大礼特別観艦式1（海軍省-公文備考-S3-47-3677）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C04016130400、画像0286-0290。

18「御次第書作製資料(2)」昭和3年公文備考儀制25巻44大礼特別観艦式1（海軍省-公文備考-S3-47-3677）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C04016130700、画像0394。「大礼観兵式日次に関する件」「昭和3年公文備考儀制25巻44大礼特別観艦式1（海軍省-公文備考-S3-47-3677）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C04016130800、画像0399。

19「大礼特別観艦式御次第書に関する件(2)」昭和3年公文備考儀制25巻44大礼特別観艦式1（海軍省-公文備考-S3-47-3677）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C04016131100、画像0479-0482。

20 宮内庁編『昭和天皇実録 第五』（東京書籍、2016年）248-250頁。

27日の日本海海戦においてバルチック艦隊に完勝した。連合艦隊は、凱旋観艦式を10月23日に横浜沖で挙行了した。日露戦争に参加した日本海軍の艦艇をはじめ、戦利品として獲得した軍艦5隻、駆逐艦2隻他も参加した。この観艦式には、初めて潜水艇が5隻参加し、潜航運動が天覧に供された。参加艦艇数は166隻に達し、明治時代最大規模の観艦式となった。

一方、第1次世界大戦後に実施された観艦式は規模が小さく、御親閲式と呼ばれた。日本は日英同盟に基づき、同大戦に連合国側で参戦した。その際、地中海にあるマルタ島を中心とする海域において連合国側の輸送船団の護衛作戦に従事したのが第2特務艦隊²¹である。その第2特務艦隊が日本に帰国した際、地中海方面における活躍に対し、その栄誉を称えるため、7月9日に横須賀沖で実施されたのが凱旋を記念する御親閲式であった。この御親閲式は、当時は公式には観艦式と呼ばれなかったが、観艦式に準じた形式で行われたことから、海軍史上は観艦式に準ずる行事として取り扱われている²²。

（3）大演習観艦式の実施状況

ア 明治期における大演習直後の観艦式

1908年に実施された観艦式は、海軍大演習の一環として実施されたものである。10月中旬より11月上旬に至る期間に、軍令部長東郷平八郎海軍大將が演習を統裁した。同演習には艦艇114隻が参加するといった大規模な陣容であった。演習の第1期は呉、佐世保、馬山浦方面において各種訓練、戦術的諸動作に習熟する訓練を実施し、第2期は南北両軍に分かれて、九州方面において対抗訓練を実施した後、神戸沖において観艦式を実施するという内容であった²³。

前年の1907年4月に「日本帝国の国防方針」、「国防に要する兵力」、「帝国軍の用兵綱領」の3つの文書からなる国防方針が定められ、その国防方針に想定敵国が示され、ロシア、アメリカ、フランス、ドイツの順序で列挙された。日露戦争の終結を転機として、日米の関係は協力から対立へと移行し極東をめぐる国際情勢は一変していた。まさに海軍大演習を迎えようとしていた時期、アメリカ海軍の艦隊²⁴の来日（後述）を迎えることとなり、この年の大演習とそれに続く観艦式は緊迫する国際社会の状況のもと緊張感をもって実施された。

21 第2特務艦隊は、巡洋艦「出雲」を旗艦（派遣当初「明石」が旗艦）として、3個駆逐隊（駆逐艦12隻）により編成され、第1次世界大戦において地中海方面に派遣された艦隊。

22 小池編著『海軍史事典』350頁。

23 「海軍大演習写真帖」（明治41年12月）防衛研究所蔵。

24 当時は艦船の塗装が白色であったことから「白色艦隊」とも呼ばれていた。

日本海軍はこの海軍大演習に関する実施要領の概案を準備する過程で、3月10日に東郷軍令部長が海軍大臣斉藤実海軍中將に対し、大演習予定計画要領を商議していた²⁵。その内容は10月中旬より30日間程度を演習期間とすること、演習期間の最終日に当たる11月17日に神戸港か伊勢湾に艦隊を集合させ、観艦式を挙行するというものであった。御親閲の行幸御次第書によると、確かに11月17日に観艦式が実施されることになっていた²⁶。明治天皇は、奈良県で実施される陸軍大演習を統裁し、11月15日に奈良県を出発し兵庫県に移動し、17日には兵庫県の舞子に設置された仮設波止場から御召艦「浅間」に乗艦する予定であった。ところが、同日に挙行予定であった観艦式は、荒天により波が高まり、一日延期されて、18日に実施された。

イ 昭和期における大演習直後の観艦式

昭和天皇の即位直後の1927年に、海軍特別大演習及び、観艦式が計画された。この特別大演習の実施計画は、4月にはすでに調整が始まっており、5月中旬には軍令部長と侍従武官長の間で大枠が計画された。特別大演習における天皇の統裁時における御召艦は、「陸奥」、同予備艦は「日向」と定められ²⁷、9月下旬から10月初旬にかけて、次第書の案が策定された²⁸。その内容は、10月20日横須賀軍港を出港し、演習を統裁、その後25日に横須賀軍港に入港、10月30日に観艦式場へ臨御し、御親閲後は、御召艦にて講評を行うといった予定であった。

昭和天皇は、御召艦「陸奥」に乗艦され、皇族の方々や海軍大臣をはじめとする関係職員の挨拶を受けた後、御召艦の前艦橋玉座において飛行機隊の運動および式場参列の諸艦艇を御親閲になり、その後、勅語を述べた。「朕始めて親しく大演習を統裁し将卒の士気旺盛にして所期の目的を達し得たるを認め又茲に朕か艦隊を親閲して軍容の整齊なるを觀朕之を懌ふ 惟ふに国軍の現状は軍紀士気の振張統帥の卓越訓練の精到諸機関の整備に須つもの洵に多し汝等軍人益々奮励上下一致して各其の本分を完うせむことを期せよ」といった内容であった²⁹。軍令部長による特別大演習終了の伝達をもって終了した。昭和天皇はこの海軍特別大演習を期に、5泊6日という長期にわたり、海軍艦艇内に滞在した。

25 「大演習計画及施行」「明治41年公文備考卷39 演習1（海軍省-公文備考-M41-39-840）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C06092042100、画像0028-0033。

26 「御次第書御治定御変更に関する往復書類」「明治41年公文備考卷40 演習2 大演習観艦式2（海軍省-公文備考-M41-40-841）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C06092044000、画像0686-0692。

27 「特別大演習御召艦に関する件」「昭和2年公文備考演習1卷67（海軍省-公文備考-S2-67-3562）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C04015770300、画像0010-0014。

28 「昭和2年特別大演習御統裁御次第に関する件」「昭和2年公文備考演習1卷67（海軍省-公文備考-S2-67-3562）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C04015770700、画像0082-0083。

29 宮内庁編『昭和天皇実録 第四』（東京書籍、2015年）141-149頁。

(4) 恒例観艦式の実施状況

恒例観艦式は大正時代に2回実施されたが、恒例観艦式には特別な意味合いがあった。日本海軍は大正という新しい時代を迎え、海軍の威容を内外に誇示するため、国家の慶事や海軍大演習のない年にも、恒例の行事として観艦式を挙行することを定めた³⁰。1913年に制定された観艦式規程により、観艦式の分類に新たに恒例観艦式を加えたのである。

一部は先に述べたことの繰り返しになるが、1913年10月9日齋藤海軍大臣が通達した「恒例観艦式挙行ノ件」によれば、恒例観艦式の制定趣旨は以下のとおりである。「海軍始めの式」は、1870年1月11日に初めて挙行され、その後は例年1月9日に実施されてきた。1878年に当時の海軍卿が「海軍始めの式」に代わる行事として、艦隊の運転や操練の諸行事を御覧になられるよう太政大臣に上申し、「海軍始めの式」が廃止された。その行事の代わりとして毎年11月10日に東京湾において恒例観艦式を挙行し、在役艦と予備艦艇の大部分を集合させ、陣形運動や操練等を御親閲されることとした。つまり、天皇に「海軍始めの式」の代わりとして、毎年11月に東京湾で海軍艦船が航行しているところを親閲してもらおうという趣旨であった³¹。

この恒例観艦式の実施に際し、参加している艦船の航行要領が新たに追加されていた。その様子は「御召艦十時式場に到り諸艦の列間を徐航し、御親閲あり、更に第一艦隊・第二艦隊の陣形運動を行いつつ予定錨地に進むを艦橋より覧」との記録から、御親閲の後に「第一艦隊・第二艦隊の陣形運動」という項目が追加されたことがわかる³²。この陣形運動とは、どのような動きだったのだろうか。「陣形運動次第」という史料によれば、部隊は2つの艦隊により編成され、停泊している御召艦「香取」を取り巻くように単縦列で艦船が航走し、途中で2回、90度の変針を実施するといったものであった³³。それまでの観艦式では、停泊艦艇を御召艦が移動しながら親閲を受ける要領であったので、恒例観艦式の実施にあたり、停泊している御召艦に陣形運動という艦船の航行の親閲が実施された初めてのケースとなった。

30 小池編著『海軍史事典』349頁。

31 「式場図、印刷物（蒔蒔刷も含む）(1)」 「大正2年公文備考巻10 儀制6 恒例観艦式2（海軍省 - 公文備考 - T2-10-1530）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C08020243100、画像0464-0465。

32 宮内省図書寮編修『大正天皇実録 補訂版 第四』（ゆまに書房、2019年）182-183頁。

33 「陣形運動」 「大正2年公文備考巻9 儀制5 恒例観艦式1（海軍省 - 公文備考 - T2-9-1529）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C08020242200、画像0261-0266。

4. 観艦式を取り巻く諸問題とその対応

(1) イギリスでの観艦式への参加とアメリカ艦隊の来日

日本海軍は、観艦式の歴史的起源をイギリスに求めており、前述したとおり 1341 年にイギリスの国王エドワード 3 世が、自ら艦隊を率いて英仏戦争に出征した際、その威容を親閲したときを始まりとしてきた。そのイギリスにおける海軍力は、日本海軍が創設された 19 世紀半ば頃には、「七つの海に太陽が没することがない」と誇るほどの最盛期を迎えていた。ロンドンのウェストミンスター寺院で行われる新国王の戴冠式は、イギリスの勢威を世界に誇示する盛典であった。イギリスの政治・経済・軍事・技術・文化等の能力は、世界最大で超一流の海軍力に裏打ちされており、戴冠式のときイギリス海軍はポーツマス軍港沖のスピットヘッド³⁴で観艦式を挙行了。世界各国の海軍は自国の力を誇示しようとして、艦歴・艦型・性能で特長のある軍艦を競って派遣し、この式典に参列させるのを例としていた。日本海軍は 3 回にわたってイギリス国王の戴冠式に付随する観艦式を経験しており³⁵、その実績は、表 2 のとおりである。

表2 イギリス国王の戴冠式付随の観艦式への参加実績

派遣艦	期 間	摘 要
「浅間」「高砂」	明治 35 年 4 月 7 日～11 月 28 日 (観艦式：6 月 16 日～18 日)	エドワード 7 世 (Albert Edward) の 戴冠式に際し観艦式参列
「鞍馬」「利根」	明治 44 年 4 月 1 日～11 月 12 日 (観艦式：6 月 24 日)	ジョージ 5 世 (George Frederick Ernest Albert) の 戴冠式に際し観艦式参列
「足柄」	昭和 12 年 4 月 3 日～7 月 6 日 (観艦式：5 月 20 日)	ジョージ 6 世 (Albert Frederick Arthur George) の 戴冠式に際し観艦式参列

(出所) 海軍歴史保存会編『日本海軍史 第十一巻』(第一法規出版株式会社、1995 年) 61-63 頁をもとに筆者作成。

1902 (明治 35) 年に派遣した「浅間」と「高砂」は、イギリスに建造を発注した艦艇であり、当時としては最新鋭の艦艇であった。日露戦争後の 1911 年に派遣した「鞍馬」と「利根」は、日露戦争後に国内で建造した艦艇であり、日本海軍がイギリスで実施された観艦式に最新鋭の艦艇を派遣していたことがわかる。1937 (昭和 12) 年に派遣した「足柄」は、1922 (大正 11) 年締結のワシントン海軍軍縮条約の排水量制限のも

34 スピットヘッド (Spithead) は、イングランド南部、ハンプシャー州のソレント海峡の東側にある停泊地であり、ポーツマス軍港の港外に当たる海域を示す。

35 野村實『日本海軍の歴史』(吉川弘文館、2002 年) 58 頁。

とで設計された10,000トン級の妙高型重巡洋艦4隻のうちの1隻として、1929年8月に就役し、1935年2月に第1次近代化改装工事を終えた比較的新しい艦であった。

前述したように、1908年の大演習観艦式の際には、悪化する日米関係が観艦式にも影響していた。この年に実施された海軍大演習は、日本海軍がアメリカを想定敵国として行った最初の演習であったとされている³⁶。演習のシナリオには、日本海軍とアメリカ海軍の海上決戦が組み込まれていたのである。

アメリカ海軍の「白色艦隊」は、1907年8月に戦艦16隻、駆逐艦6隻および補助艦船数隻をもって大西洋艦隊を編成し、12月中旬にアメリカのバージニア州ハンプトン・ローズを出港し、ブラジルを経てマゼラン海峡を通過し、太平洋方面に進出しチリ、メキシコを経て1908年5月にサンフランシスコに到着していた。日本への寄港については、移民問題や排日運動の高まり等があり艦隊派遣の是非についてアメリカ国内にも賛否両論があったが、結局のところ4月28日に日本への寄港が公表された。横浜には10月17日から24日まで寄港することが公表されたのである³⁷。アメリカ艦隊の来日に際し、前例を見ないほどの大規模な歓迎行事を計画する一方、「白色艦隊」と対等の隻数である艦隊を編成し東京湾に待機させた。さらに艦隊の来航に合わせた大演習を実施し、予備艦を含む大規模な海上兵力の有事即応態勢をとっていた。このように緊迫した国際社会の状況を一変させたのは観艦式を中心とした歓迎行事であり、友好ムードの醸成に一役買うことができたのである。

（2）恒例観艦式の廃止

1913年に観艦式規程を定め、新たに恒例観艦式という分類を設け観艦式を実施していたが、1916年の恒例観艦式を最後に、1919年の観艦式規程の改定により恒例観艦式は廃止されることとなった。恒例観艦式の廃止について、1916年の恒例観艦式終了後に提出された「大正五年恒例観艦式に関する総合意見」は、「恒例観艦式を小演習の一部とし演習計画中に観艦式を入れること恰も大演習後に於て行わる大演習観艦式の如くならしめんとする説あり、今回の如く演習参加艦艇と観艦式参列艦艇と同一にして、且其の挙行日も相接近するときは艦隊の編成、指揮官の任命其の他演習経過の奏上等において利便多く諸事好都合なるへしと思考さるるを以て審に観艦式事務上に於ける便否をも考察し要すれば観艦式規程を本説に合する如く改正するを可なりと

36 防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書 大本営海軍部・聯合艦隊〈1〉——開戦まで——』（朝雲新聞社、1975年）132頁。

37 川井裕「外国軍艦の日本訪問に関する一考察——1908（明治41）年の米国大西洋艦隊を対象として——」『戦史研究年報』第14号（2011年3月）75-79頁。

認む」としている³⁸。つまり、恒例観艦式は、実態として大演習直後の観艦式と同じ形態で実施できるので大演習観艦式と同じ部類の観艦式ではないかというのが廃止の理由であった。

またそれに加えて観艦式をテーマにした先行研究では、当時の新聞紙上の社説を引用する形で、恒例観艦式は当時の海軍が陸軍に対抗して計画したものであり海軍の拡張を目指して計画された政略であること、さらには、観艦式に資金を投入するより移民保護を優先すべきであるとの海軍部内の匿名将校の意見を紹介し、横須賀沖で実施された恒例観艦式を、直接市民が見学するためには、船上から見るしかなく、そのために船を借り上げるための金銭的負担が大きくなって、市民が容易に拝観することができなくなり、結果として地元市民の観艦式への関心が低くなったこと等を挙げている³⁹。

(3) 艦船の航行要領に関する検討

1900年の観艦式以来、御召艦が停泊している艦艇の周囲を移動する方式が採用され、いわゆる停泊式で実施されていた。ところが、先に述べたように大正時代の恒例観艦式では、停泊している御召艦の周囲を受閲艦艇が移動する陣形運動が追加され、部分的ながいわゆる移動式が初めて採用された。

明治時代に行われた停泊式の観艦式では、御召艦や参列艦船はどのような動きをしたのだろうか。1908年の大演習観艦式では、御召艦は「浅間」、供奉艦⁴⁰は「満州」、「浦波」、「豊橋」、「韓崎」の4隻であり、御親閲中は玉座の側に待立した大演習統監の東郷海軍大將が各艦長以上の指揮官の名前を次々と奏上し、各艦は御召艦の通過に随い皇礼砲を発射して儀礼を行った。その航路の状況は、「明治四十一年十一月十七日神戸沖観艦式諸艦船排列位置図」から読み取れる⁴¹。さらに参列した諸外国が登舷礼を行い、そのうちドイツ艦艇は「君が代」を吹奏して敬意を表した⁴²。このように初期の観艦式においては、御召艦が停泊している受閲艦艇の周囲を移動する方式で実施されていた。

ところが、大正時代の恒例観艦式においては、停泊している御召艦の周囲を受閲艦艇が移動する陣形運動が追加された。いわゆる移動式である。その恒例観艦式は1919

38「観艦式に関する総合意見(1)」[「大正5年公文備考巻14儀制12(海軍省-公文備考-T5-14-1886)」(防衛研究所蔵)、JACAR Ref.C08020744400、画像1458-1459。

39 木村「大正期における日本海軍の恒例観艦式」22頁。

40 供奉(ぐぶ)艦とは、御召艦に御供する艦のこと。

41「行幸御次第書並勅語(1)」[「明治41年公文備考巻40演習2大演習観艦式2(海軍省-公文備考-M41-40-841)」(防衛研究所蔵)、JACAR Ref.C06092043800、画像0595-0598。

42 中川務「明治四十一年海軍大演習記念写真帖」『海軍文庫月報』No.6(1981年4月)10頁。

年に廃止されたが、大正時代以後における艦船の航行要領はどのように行われたのか。すなわち、移動式の観艦式は採用されたのであろうか。

時代は大正から昭和に変わり、1928年に実施された大礼特別観艦式における艦船の航行要領を採り上げる。その計画段階の案に、「大礼観艦式には、参列艦船の大部は艦隊運動中に御親閲を受くこと」と記されており、いわゆる移動式を採り入れていた。ところが、この案に対し第1艦隊参謀長から海軍省の軍務局長に対し所見が提出された。その所見には、東京湾において艦隊運動が実施できる海域を検討し、艦隊運動にかかる所要時間を具体的に計算したところ多くの課題があるという内容であった。その課題とは、十分な海域を確保すると一般の船舶が行きかう航路（浦賀水道以北）を限定してしまうこと、多くの時間が必要となり艦艇側に余裕がないこと、天候の障害を受けやすいこと等の理由により、移動式の観艦式実施には相当な困難が伴うといった内容であった。

この所見を得た海軍省の軍務局員は、「陛下にとって大礼の儀の関係行事で連日多忙を極めている中、観艦式のために約3時間も費やすことは恐れ多い」、「当日の天候により混乱をきたす可能性があり、予定通りの実施が困難であること」、「服装、賜餐の関係上不便なことが多い」との意見を添えて軍務局長に進言した。この進言を受けた軍務局長は、「本件、種々の実行難あるをもって、御大礼観艦式は従前通り碇泊式となし、後年、大演習観艦式のとき移動式研究のこととしかるべく」と決定することとなった⁴³。続いて、1930年の特別大演習観艦式においても、移動式の観艦式は採用されず、いわゆる停泊式が採用された。その状況は「観艦式式場図」によりわかる⁴⁴。

ところが、1936年の特別大演習観艦式の際、一転して移動式の観艦式が実施されることとなった。その状況は「特別大演習観艦式式場図」により判明するが、艦船の移動要領には、大阪港沖から神戸港沖、さらには淡路島沖周辺までの広大な海域が使用され、大正時代の恒例観艦式で実施された陣形運動と比較すれば、艦船の運動要領が相当異なったものであることがわかる⁴⁵。

このように艦船の航行要領については、停泊式、移動式について試行されてきたが、どちらを採用するかについては、最高指揮官の行動予定や、実施海域における船舶の混雑状況、天候が急変した場合の対策、運営上の問題点等を考慮して検討されてきた。

43「移動観艦式の研究」[昭和3年公文備考儀制26巻45 大礼特別観艦式2（海軍省 - 公文備考 -S3-48-3678）]（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C04016132600、画像0835-0853。

44「官房第3171号5.10.1 昭和5年特別大演習観艦式御次第書に関する件（1）」[昭和5年公文備考C巻5 儀制大演習観艦式（3）海軍大臣官房記録昭和5（海軍省 - 公文備考 -S5-38-3974）]（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C05021052300、画像0086。

45「御次第書」[昭和11年公文備考昭和11年C 儀制巻21（20）（海軍省 - 公文備考 -S11-61-5043）]（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C05034799300、画像0216-0217。

(4) 運営態勢の検討

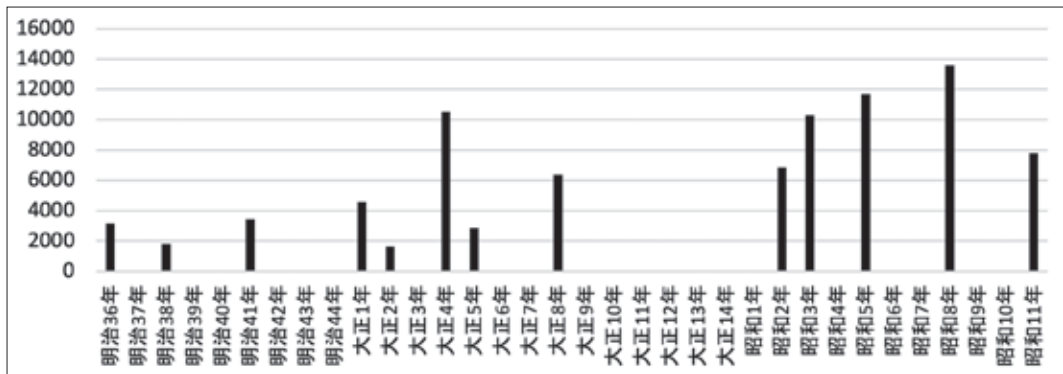
1908 年の大演習観艦式が終了したあと、観艦式準備委員がまとめた意見が残されている。そこには 15 項目の意見が記されており、いずれも観艦式を実施した直後に、準備委員が感じた事柄を記録したものである。当時の準備委員が改善すべきと感じた点等がわかり、興味深い。第 1 項目に掲げられた意見は、「観艦式を大演習の一部とし挙行の場合には従前の通り海軍省にて担任することの不便不都合なることは今回実地其局に当たりたる者の齊しく認むる所にして統監部と海軍大臣並に観艦式準備委員と統監部との間の連絡を保つ為め徒らに頻繁なる書類の往復を要し且つ疎通の十全なることは期し難きを以て今後は全然統監部に於て処理するを穩当にして便利の方法と認む」であった。第 2 項目としては、「統監部に於て処理するものとし左記の通り役員を配置せは余り混雑することなからんか」としたうえで、役員の編成案が具体的な人数とともに記載されている。

このような所見により、観艦式の実施にあたっては、海軍省や艦隊司令部の固有配置の職員以外に、専従の役員が必要となっていたことがわかる。さらに、そうした役員は、観艦式当日だけではなく、事前の準備や調整が重要であると述べている。第 3 項目には、「主任たるへき者一名は属官一名を伴ひ遅くも式日十日以前に出張し地方官憲と諸般の打合せをなし且つ諸種の協議に応じ以て適宜に処理し置かされは式日直際に迫りて混雑を究むるに至る其他の委員は約四五日以前に便宜出張し在るを良しと考ふ」といった意見が、第 7 項目には、「地方官公吏を案内するには地方長官と十分なる協議をなしかなり其の人員を減少ししかるべきと認むまた徳望家中にても十分吟味し相当の身分のある人にあらされは加えさることとし各会社商会等の支配人その他の役員と権衡を保つことに留意し吟味の上にも吟味を重ね不平の起らざる様すること必要なり之れか為には可成少数の人に止むる方良方ならんと思ふ」といった意見が記載されているところから、見学者の数が次第に増加しており、その業務を誰が担当するのか問題となっていた様子が伺える⁴⁶。

こうした業務量の増加は、海軍省が保管していた「公文備考」の量からも間接的に推測できる。1903 年から 1937 年までの「公文備考」で、観艦式に関する記事を集計すると、簿冊数は 146 冊、簿冊に含まれる画像数は 84,635 画像となり、しかも、年々増加していることが判明する。その画像数の状況は表 3 のとおりである。

46 「観艦式に関する卓見及参考覚書」「明治 41 年公文備考巻 40 演習 2 大演習艦観式 2（海軍省 - 公文備考 - M41-40-841）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C06092043700、画像 0545-0551。

表3 「公文備考」に含まれる観艦式関連の1次史料の画像数



(出所)「公文備考」をもとに筆者作成。

(5) 伝染病への対応

戦前の日本ではペストや他の伝染病（コレラ、腸チフス、赤痢等）が、大きな社会問題となっていた。日本陸海軍においても海外出征兵士が伝染病で死亡する事例が多発しており、1904年2月13日伝染病研究所長であった北里柴三郎博士が、内務大臣宛てに「出征軍隊に予防接種施行の建議」を提出していた。その建議の要旨は、悪疫の流行を予防する方法として予防接種というのがあり、出征する軍隊に対し予防接種を行うことを提言していた⁴⁷。

伝染病に関する問題点は、海軍が実施する観艦式にも大きく影響を及ぼしていた。1908年の大演習観艦式を神戸沖で実施する際に、神戸市内のペスト発生状況について専門家である北里博士の所見を得て、予定どおり観艦式を実施することができた⁴⁸。その後の観艦式においても、伝染病に対する海軍の苦悩が見られる。1912年の大演習観艦式においては、観艦式に参加し午餐の会場として使用する予定であった「摂津」において赤痢患者1人、腸チフス患者5人が発生したため、観艦式実施直前になって、午餐会場を急遽「安藝」に変更する事態が発生した⁴⁹。

最初の恒例観艦式である1913年秋の観艦式は、横浜沖で計画されていた。ところが、天皇が乗艇される予定の横浜港近傍においてペスト病が流行していた。横浜市では、ペスト病が1902年に初めて確認されて以降、流行を重ねており、何回も発生を

47「医務衛生に関する請願建議」「明治37～38年戦時書類巻148医事（海軍省-日露戦書-M37-148-706）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C09020263600、画像2222-2231。

48「神戸地方軍艦の衛生に関する件」「明治41年公文備考巻44演習6大演習艦観式6（海軍省-公文備考-M41-44-845）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C06092051900、画像1015-1016。

49「御次第書御治定に関する件（2）」「明治45年～大正11年公文備考巻57演習2大演習観艦式1（海軍省-公文備考-T1-57-1406）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C08020079600、画像0077-0082、0086-0087。

繰り返していた。恒例観艦式が計画された1913年9月も流行しており、市の中央部では翌1914年に至るまで23人の患者（18人死亡）が発生していた⁵⁰。

このような伝染病の状況から、天皇陛下が観艦式において横浜港から乗艇される計画は取りやめられ、横須賀軍港から乗艇されるように変更された⁵¹。1913年10月30日、財部彪恒例観艦式事務委員長から秋山真之恒例観艦式事務委員に対し通知されたその内容は、「観艦式に際し横浜市御通過はペスト病の状況に鑑み御取止めとなり横須賀軍港より御乗艦の事に変更相成りたる」であった⁵²。観艦式の式場の位置や、艦隊の運動区域についても予定を変更した。

その後も、伝染病の発生は続いており、1915年12月4日の特別観艦式の開催にあたって、神奈川県庁から入手していた「横浜市伝染病患者現在数調査表」が、12月2日には特別観艦式艦隊司令部から参加部隊に対し配布された。この調査表は、11月27日現在の横浜市における伝染病患者（「腸チフス」、「パラチフス」、「ジフテリア」、「猩紅熱」）の発生状況であった。さらに、これらの情報は横浜市周辺の地図に患者の発生場所が転記されていたが、いずれの患者も全部病院に収容され治療中である旨の注記がある⁵³。

1916年の恒例観艦式の開催にあたって、伝染病に対する備えが実施された。御召艦には「筑波」が指定され、御召艦の予備艦として「生駒」が指定されていた⁵⁴。御召艦として事前の準備状況を検分した際に、各種の確認事項が記録された。「筑波」は前年の特別観艦式で御召艦を担当、実績を積んでおり各種の設備等は前年度のとおりとしたほか、伝染病対策について特に注意が払われていた。「御召艦内に於ける消毒装置はこの際特に整備し置くこと」が指示され、さらに「観艦式当日御手許に差し出すべきものはすべて消毒を要するにつき式場図および拝謁名簿その他書類はあらかじめ宮内省書記官に送付すること右書類は宮内省にて消毒の上当日御召艦に携行し御手許に差し出す」とされ、当時の伝染病対策の状況がわかる⁵⁵。

50 横浜役所『横浜市史稿 政治編三』（横浜市、1932年）565-570頁。

51 「創始並挙行(3)」[「大正2年公文備考巻9 儀制5 恒例観艦式1（海軍省-公文備考-T2-9-1529）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C08020241500、画像0116-0117。

52 「陣形運動」[「大正2年公文備考巻9 儀制5 恒例観艦式1（海軍省-公文備考-T2-9-1529）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C08020242200、画像0294-0295。

53 「特別観艦式艦隊命令訓令等（2）」[「大正4年公文備考巻32 儀制30（海軍省-公文備考-T4-34-1781）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C08020582900、画像1331-1335、1345-1348。

54 「御召艦設備の件」[「大正5年公文備考巻12 儀制10（海軍省-公文備考-T5-12-1884）」（防衛研究所蔵）、JACAR Ref.C08020739400、画像0016-0018。

55 同上、画像0028-0030。

おわりに

本稿では、日本海軍における観艦式の変遷について検討した。海軍省が記録した「公文備考」の中には、観艦式に関する記録が数多く残されており、その数は膨大な量である。海軍が実施した観艦式という一つの行事を中心にその変遷を観察すると、その当時のさまざまな問題点とその解決に苦慮した日本海軍の姿が浮かび上がってきた。

日本海軍は明治、大正、昭和の3世代にわたり観艦式を実施してきた。まだ観艦式という名称が使用されていない時期から、世界有数の海軍と称される海軍に成長するまでの期間において、日本海軍が観艦式を実施する際に、さまざまな問題に直面しながらも、その都度解決に尽力していた。各種文献に掲載されている観艦式実施状況の一覧を見ると、実施年月日、場所、観艦式の名称、御召艦の名前、参加艦艇の隻数（総トン数）、参加航空機の数等が記載されている。これらの観艦式を扱った文献には、当時の国際情勢や、観艦式における艦船の航行要領、観艦式を担当する部署の運営態勢、そして伝染病への対策等、さまざまな問題点と対策等が含まれている。観艦式という行事に焦点を当てて日本海軍を研究することは、時代は異なっても、同様な形態で観艦式を実施している海上自衛隊にとって資とする部分があるのではないだろうか。

（防衛研究所）